

(様式2)

議員行政視察報告書

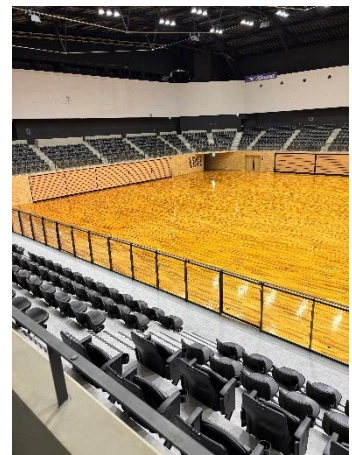
議員名	高木 ひろたか
視察地	広島県 広島市
視察年月日	令和7年5月27日(火)
〈視察内容〉	ひろしま街づくりデザイン賞事業について
○概要	<p>広島市で行われている「ひろしま街づくりデザイン賞」は、昭和53年国際平和都市「広島」を創造する「広島市新基本計画」において、「都市美づくり」として優秀建築物及び優秀緑化施設の表彰制度を創設。平成3年に優秀宅地開発を新設し、3つの表彰制度となる。平成6年には、これらを統合し「ひろしま街づくりデザイン賞」となる。</p> <p>令和6年度の取り組みでは、①建築物、②個人住宅、③アート、④広告、⑤花と緑、⑥街並み、⑦景観まちづくり活動の7部門であり、一定期間募集し(166件応募)選考委員会が各部門賞を決定。その部門賞から大賞を1件選考した。表彰式は、建物内ではなく、市民が行き交う地下の歩行空間で実施し、応募者全員に記念ボールペンを贈呈、大賞には表彰銘板及び盾を贈呈している。</p> <p>応募件数も減少傾向にあったことから、平成12年度以降2年に1度の開催に変更。受賞物件はパンフレットやホームページで広く周知される。それにより、訪れる市民等がいるが、その受け入れや対応については受賞者に任せており、とくに個人住宅で受賞された方については、プライバシーの観点が課題である。受賞した物件に対しての修繕費や維持費等、市からの補助金等は一切なし。今後の方向性として、公共部門の新設を検討している。</p>
○本市での活用等	<p>本市においては、平成2年度より都市景観賞(第5回からは旭川市景観賞)という事業を展開しているが、平成26年度の第6回からは中断している。ユネスコデザイン都市として認定を受けた本市であることから、街の景観やデザイン性については重要であり、旭川市景観賞の再開と合わせて、デザインを取り入れたまちづくりを進めることが必要であると実感した。</p>



(様式2)

議員行政視察報告書

議員名	高木 ひろたか
視察地	滋賀県 大津市
視察年月日	令和7年5月28日(水)
〈視察内容〉	滋賀ダイハツアリーナ
○概要	
<p>滋賀県の滋賀ダイハツアリーナを視察した。PFI(BTO)手法で約95億円の建設費で2022年12月1日にオープンした。ここ滋賀ダイハツアリーナをホームとするプロチームは、滋賀レイクス(プロバスケットチーム2026年からBリーグプレミアに参戦)と東レアローズ滋賀(女子プロバレーボールチーム・SVリーグ女子)の2チームがホームとしている。そのため、メインアリーナは固定席・可動席合わせて最大約5,000席の観客席が確保されている。</p> <p>また、運営は日立キャピタルやミズノなどが出資した共同企業体が15年間の契約で指定管理者として運営し、さらにネーミングライツとして「ダイハツ」が年500万円5年の契約をしている。ランニングコストとしては、利用料だけでは維持できず建設費用の分割負担を含め、県から年約4~5億円の委託料がある。</p> <p>施設は、メインアリーナ・サブアリーナ(観客席約200席)、トレーニングルームに大小会議室、外にはフットサル等ができる人工芝の多目的広場があり、アリーナ横の選手控室などすべてが機能的に使いやすく配置されている。</p> <p>課題としては、2つのプロチームがホームとしていることから、アマチュアの方との利用調整が難しい点。プロの興行の際は、トイレ(とくに女子)や駐車場(常設約500台・臨時約400台)が足りない状況が見受けられるとのこと。個人的には、場所が中心市街地から外れており交通便も課題があると感じた。</p>	
○本市での活用等	
<p>本市においては、老朽化が進む総合体育館の建て替えが計画されており、また男子プロバレーボールチームヴォレアス北海道(SVリーグ)のホームとなることもあり、5,000席以上のアリーナが計画されている。また、建設・運営手法もPFIの他、民設民営での手法も検討されている。今回の視察先では、民設民営は建設した後の運営が重要であり、滋賀県としては厳しいと判断したとのことであり、旭川での建設・運営手法はしっかり検討する必要がある。</p> <p>また、同時期に建設が計画されている東光スポーツ公園の体育館についても、必要性等、合わせて考えることが必要だと感じる視察であった。</p>	



(様式2)

議員行政視察報告書

議 員 名	高木 ひろたか
視 察 地	大阪府 大阪市
視察年月日	令和7年5月30日(金)
〈視察内容〉	舞洲スラッジセンター
○概要	
<p>大阪市建設局所管の舞洲スラッジセンターを視察した。スラッジセンターは、これまで脱水、焼却後埋め立て処分をしていた下水汚泥を有効活用するため溶融スラグ化し、建設資材等に利用するための施設として、2004年大阪市此花区に建設された。</p> <p>大阪市内には12カ所の下水処理場があり、トラックによる陸上での汚泥の運搬には悪臭等の問題があることから、すべての下水処理場とスラッジセンターが地中に埋設するパイプ(汚泥圧送管)でつながっている。地下1階、地上6階の施設はカラフルなデザインで、外壁の赤色ストライプ模様は「炎」をイメージし、煙突など青色は「海の青・空」をイメージ。住宅のような格子模様は「人の息吹」を感じさせ、煙突上部の金色の輝きは「夢と希望」を表しています。また、バルコニーや屋上には植栽を施すなど、特徴的なその外観はおとぎの国のお城のようで、オーストリアの環境保護芸術家である故フリーデンスライヒ・フンデルトヴァッサー氏の設計は、近隣にある大阪広域環境施設組合の焼却工場舞洲工場と合わせて特別な施設として話題になっている。</p> <p>スラッジセンターで作られる溶融スラグは、路盤材・砂の代わりに埋め戻し材や盛り土など幅広く有効利用されているが、需要は年々減少傾向にあり100%までは利用されていない現状があり、今後の汚泥の有効活用の方向性の転換が課題とのことである。</p>	
	
○本市での活用等	
<p>下水汚泥の有効活用は本市においても重要な課題であり、議会の中でも幾度か質疑が展開されている。大阪市との都市規模の差により、下水汚泥の量にも大きな違いがあり、また有効活用も溶融スラグより肥料化が適していると考えるが、今回の視察先である大阪市では肥料化について「供給先がないということもあるが、重金属等有害物質の関係で肥料化はしなかった。溶融スラグは高温により処理した物であり、安定しているため有害物質は出ることはない。」との見解をお聞きした。本市による汚泥の有効活用も有害物質との関連が一番の課題であると考え。今回の視察での内容を踏まえ、今後の議論としたい。</p>	